

## 学生の声

## 論文投稿を通して得られたもの

情報学研究科 知能情報学専攻 黒橋研究室 博士後期課程1年 植田 暢 大

研究活動においては、一定の成果が得られるとそれを国際学会などに投稿することになる。私は、修士2年の頃に国際学会に論文を投稿し、発表を行った。本稿ではその経験を通して得られた学びについてその道のりとともに共有したいと思う。

私は、日本語テキストにおいて明示されていない主語や目的語を補う、述語項構造解析というタスクの精度向上に取り組んでいた。私の研究ではそれに加え、類似する他3種類のタスクも同時に解析することを試みていた。修士1年の終わり頃には一定の成果が得られたため、国内学会で発表を行った。この発表は光栄にも若手奨励賞に選ばれ、次は国際学会で発表する運びとなった。

しかし、国際学会への投稿は一筋縄ではいかなかった。解析精度の向上には成功していたが、国際学会に投稿する上で今一つ目新しさが足りなかった。そのため、さらなる精度向上のため手法の改良を様々な試みたがあまり良い結果は得られず、じりじりと締め切りが近づいてきた。そこで指導教員と相談し、同時解析するタスクの組み合わせを変化させ、その性質を調べるという方向に舵を切った。全ての組み合わせで実験を行い、結果を俯瞰したところ、共参照解析という1つのタスクの特異性を見出すことができた。これを主張の大きなポイントとすることで、無事論文はその年の国際学会（COLING2020）に採択されることとなった。

思えば、タスクの精度を改善するという視点にこだわっていれば論文採択は叶わなかっただろう。論文執筆から採択までを通して、元からの考えに囚われず、常に幅広い視野で現象を見つめることの大切さを実感した。日々研究していく上で、この経験を心に留めつつ常に幅広い視点を持てるよう精進していきたい。

## 研究室での3年間

工学研究科 電子工学専攻 木本研究室 博士後期課程1年 原 征 大

ついこの間研究室配属されたばかりのようなつもりでいたが、気づいたらD1になっていた。研究室での3年間はとても密度が濃く、研究を進めながら学会発表や論文執筆に取り組み、種々の申請書の執筆、実験装置の維持管理や講義のレポートをこなし…という感じで、忙しい日常を過ごしていた。楽な道のりではなかったが、苦労しながらも様々な知識・能力を身につけ、これまでの人生の中で最も大きく成長できた3年間だったと感じている。

新たな知識や能力を獲得し、それらをより深め磨こうとするために、私自身はどのような心構えでいる（いた）だろうか、と考えてみると、「無知の知」的な意識が常に根底にあることに思い至る。最初から何でも知っていて何でもできる人はいないのだから、学びの機会があるたびに一つ一つ素直に受け入れ着実に身につけていけばいい、自分はいつでもビギナーだ、という意識をもつことが、自分の成長の土台になってきたように思う。

…と、自身の心構えについて語ってきたが、実際のところ、周囲の人たちの助けがなければ、力を伸ばすことはおろか何一つ成し遂げることなどできなかった。人との出会いや環境に恵まれ、自分の努力だけではどうにもならないような幸運にも恵まれてきた（私が大学院に入学したのと同時に卓越大学院プログラムがスタートしたことなどはその最たる例）。とにかく感謝するばかりである。これまで享受してきたことを周囲の人に還元し、誰かの助けになれるよう努めることが、これからの私の新たな役割・責任であると感じている。

D1という研究室生活の折返し地点でこの原稿を執筆する機会を頂いたので、何を書けば良いかと締め切り当日まで右往左往しつつ、これまでのことをあれこれ振り返ってみた。今後も引き続き諸々に励んでいきたい。